

プロローグ

- ① 1999→2000 年大好きな歌手のカウントダウンコンサートで福岡
- ② 人生をひっくり返した 2001 年 7 月 15 日
- ③ 40 日間意識不明 重症→二度目の生死さまよい
- ④ ともだち
- ⑤ リハビリで通院(転院先探し)
- ⑥ 神奈川リハビリセンター
- ⑦ 事故前に申し込んだコンサートのチケット
- ⑧ お菓子作り
- ⑨ おさえられない感情
- ⑩ 長野のお寺に住み込み修行
- ⑪ カラオケ
- ⑫ 二回目の神奈川リハビリ
- ⑬ 車再運転
- ⑭ パン屋でパート
- ⑮ 2004 年 8 月 28 日(土)お台場『熱風』
- ⑯ 平成 17 年建設会社へ障害者雇用で初めて社会に出る
- ⑰ なんだって出来るんだ！
- ⑱ 祖母介護の為退職、父の死
- ⑲ 身体障害者手帳オープンで、病院事務
- ⑳ 障害者職業センター
- ㉑ 平成 21 年 5 月介護職員基礎研修課程から介護員として就職
- ㉒ 平成 26 年 2 月愛犬の死 3 月祖母の死
- ㉓ 自分で始めた PT・OT・心理と歯科矯正
- ㉔ 人の良い所を見るクセを…
- ㉕ 事故から 15 年目に加害者の謝罪を受ける
- ㉖ メール
- ㉗ 認めたくない顔面麻痺

エピローグ

ASKA やく

プロローグ

私は16年前、歩いていたところ事故に遭いました。

リハビリをしていた時、

『私はこれからどうなってしまうのだろうか…』
という不安で、毎日潰されそうでした。

この文章は、自分の記録を残そうと思い、過去を思い出しながら綴りました。

① 1999→2000 大好きな歌手のカウントダウンコンサートで福岡

1999年12月31日

寒さ厳しい、北陸の新潟から一先ず、東京に向かい羽田空港から福岡へ向かった。

1999→2000年、私が大ファンのCHAGE&ASKAのカウントダウンコンサートに参加する為。

世紀をまたぐ年越しカウントダウンコンサートを彼らの地元・福岡は九州と言っても、年末は寒い筈。防寒を完全にして行っただが、その年の年末の福岡は暖かく、着ていったコートすら脱いでしまう程だった。

高校を卒業して働き始めた私と、高校生の時からいつも一緒にコンサートに行っていた友人は、大学生となっていた。お金がない二人だったので、観光も考えずホテルも取らず、コンサート終了後はそのまま始発が出る迄ドームに居ればいい、という安易で無謀な考えでいた。

今なら絶対出来ないけれど、若いって…考えなしってコワイ…

小学校6年の時に発売されたSAYYESのCHAGE&ASKAの音楽に魅かれ、ついに世紀をまたぐこの時を、彼らの地元で彼らと一緒に過ごす、と両親に伝えた時は、心底呆れ果てられたが、私自身は最高に幸せで、もう死んでもいい！と、冗談で思っていたこの時から一年後、本当に死にそうになるなんて、誰が予想出来ただろう…？

② 人生をひっくり返した2001年(平成13年)7月15日

この日は休日だった。映画好きな私は、前から観たかった『AI』を観に行く事にした。私が住んでいる市には、映画館が無くなったので、車で一時間半離れた映画館がある市に観に行った。

映画を観終わり、帰った夏の夜の20時頃でもぼんやりと明るい。

遅くなったが、愛犬の散歩に出た。
外は少し小雨が降りそうな空模様

「散歩に行つて来るねー!」

と、母に声を掛けてから家を出た。いつも行く散歩コースに歩みを進めた時だった。
家を後にした直後、突然私の目の前は真っ暗になった。

…それからどのくらい時間が経つたのだろうか？

春のような、花いっぱいの花畑の中に私は居た。

私の家は百年続く、いわゆる老舗の割烹料理屋。

小さい頃から家業の仕事の手伝いに、何人か来ていたので、私は両親・祖父母の他、
その家業のお手伝いさん達に可愛がられ成長した。

手伝いに来られていたひとり、江部さんが花畑の中の私の目の前に居た。

気温は寒くもなく、暑くもなく、天気は曇りで暗くはなかった。

その脇にはサラサラと川が流れていた。遠くには山が見えた。

何処なんだろう？と、疑問に思う前に、

「これ以上コッチに来るにはまだ早い。帰らないとフライドポテトあげないから帰りなさい」

と、江部さんから言われた。

幼かった頃の私は、江部さんが家業のお客さんのオードブルを作る時に揚げるフライドポテトが大好きで、フライドポテトを揚げている時、少しもらっていた。

こどもの私にとって、揚げたてのフライドポテトは最高に美味しいオヤツだった。

『…そうか、フライドポテトをもらえないなら帰ろう』
と、単純に思った事だけは覚えている。

何処に帰るのかすらわからないのに…

③ 40日間意識不明重体→二度目の生死さまよい

…それからどのくらいの時間だったのだろうか？

愛犬の散歩に出た直後に、私は後ろから来た車にはねられ、家二軒半飛ばされ頭から落ちていた。

散歩に出たばかりだったので、事故現場は家のすぐ近くだった。

物凄い大きい衝撃音だったので、近所の人が出て来た。

目撃した近所の人が、はねられた私の顔を見て、ウチに知らせに走った。

その日も家業の割烹はお客さんがあったので、母はお座敷の方に出て居た。

話を聞いた母は

「順子はさっきアル(犬の名前)の散歩に行った筈」

と思いながら、一時従業員さんにお客さんをお願いし、半信半疑に事故現場に向かった。

現場では、近所の人だかりと加害者と、先程「散歩に行つて来る」と出て行つた私が横たわっていた。右足がありえない方向に曲がり、夏場なので薄着だった私は身体中擦り傷で血が流れ居た。

その変わり果てた姿を母が見た時、半狂乱になったという。

その後、病気を患っていた父も現場に来て、取り乱している母を押さえた、と聞く。

親戚中に電話が行き、救急搬送された病院に親戚が集まった。

一緒に住んでいる父方の祖母はそれでも気丈に

「店の方はしておくから、病院に行きなさい。」

と、父と母を病院に行かせた。

母方の祖母は高齢だったので、とりあえず家に居てもらったが、

私が事故に遭った話を聞いた時、足がガクガク震えた、と後から祖母から聞いた。

病院に駆け付けた親戚の叔母は加害者の足を見て

「こんな高いヒールで運転していたから、事故起こしたんだ！」

と怒ったと聞く。

長い間、救急車は救急搬送された病院の前から動かなかった。

私が住んでいる柏崎で、一番大きい病院に搬送されたけれど、

その病院の医師が手に負えないと判断されれば、隣の市の病院に運ぶ為だった。

救急車が搬送した病院から去ったのは、だいぶ時間経ってからだったと聞く。

こうして私は、地元の柏崎刈羽総合病院(現・柏崎医療センター)で治療をする事になった。

意識不明の時に、折れた右足の手術をした。

整形外科の先生が『女性の足に傷があったら、可哀想だ』と、右足首の脇を目立たないように小さく手術して、折れた骨を手術で取り、ボルトを入れた。

：が、意識不明でも身体に違うモノを入れられた、という感覚はあったのか、

折れた右足を高く振り上げ、思いつきベットに落とす、という行為を何度も繰り返したらしい。

無意識に、足についた異物を振り払おうとしたのではないか、と思う。

それでも衝撃を少なくしようと、夏だったので手に入りにくかったらしいが、厚い座布団

を買い折れた右足に巻いた：が、それでも足は高く振り上げ、落とされ…終いには、入れたボルトが足から出て来て意識不明の内に手術やり直しとなった。

整形の先生の気遣いもむなしく、今度は右足のすねの真ん前にメス入れられたので、私の右足には二か所手術跡がある。

右腕肘は折れた訳ではなかったが、夏の地面と擦れ血が止まらなかったもので、縫った、と後から聞いた。あと、右おでこも少し切れてしまい縫った手術後があるが、自分でもよくわからない(笑)

私の身体は傷だらけとなったが、おでこは少し切れたが頭の手術をしないで済んだのは、加害者が看護師で救急車が到着する前に、その場で出来る応急処置をしたからだ、と私は思った。

事故後脳に酸素が行くよう、嘔吐物を吐かせ、呼吸が止まらないよう適切な向きにした、と聞く。最初、加害者に対してはヒールを履いての運転をしていた事についての怒りしかなかったが、事故に遭ってから、15年目にやっと加害者の謝罪を受けたのだが、その話はもう少しあとで。

意識不明だった私は個室に居た為、

意識回復の為、音楽をかけていた、と母は言う。

私がチャゲアスのファンなので、少しはかけてくれたらしいが(笑)

その時NHKの連続小説【ちゅらさん】が放映されており、

その主題歌をKiroroが歌っていて、そのBestFriendをよくかけていた、と母は言う。

確かに、妙にBestFriendは頭に残っていた。

意識が無くなっても耳は最後迄聞こえる、というのは、実体験より本当だと思う。

BestFriend

もう大丈夫心配ないと泣きそうな私の側で

いつも変わらない笑顔でささやいてくれた

まだ まだ まだ やれるよ だっていつでも輝いてる

時には急ぎすぎて 見失う事もあるよ仕方ない

ずっと見守っているからって笑顔で いつものように抱きしめた

あなたの笑顔に何度助けられただろう ありがとうありがとう BestFriend

こんなにたくさんの幸せ感じるときは一瞬で

ここにいるすべての仲間から最高のプレゼント

まだ まだ まだ やれるよ だっていつでもみんな側にいる

きつと今ここでやりとげられること どんなことも力に変わる

ずっと見守っているからって笑顔で いつものように抱きしめた

みんなの笑顔に何度助けられただろう ありがとうありがとう BestFriend

意識が戻ったのは7月15日から45日も経っていたという。

『意識が戻る』というより、【反応】が開始めたのが8月のお盆過ぎだった。

病室を歩く人を、ベットに寝ている私が目線で追っていたのを、毎日付き添いに来てくれた祖母が気づいた。

閉じていた目を開いて…ではなく、私は目を閉じていなかった、らしい。

今考えれば、目を閉じなかったのは、顔面麻痺の症状が始めていたのかもしれない。自分で言うのもなんだけれど、私は目が大きい方ではないのだけれど、

目を閉じない私を見て母は

「この子こんなにも目が大きかったかしら？」

と思った、と言う。

意識が戻ってから、身体中が痛かったけれど、特に骨折した右足がすごく痛かった。

右足の骨折部位を処置し、ボルトを入れられ骨折部位付近の筋肉が引つ張られるような感覚の痛みは、事故から16年経った今も、気圧の関係で古傷が痛む時がある。

今、痛みを感じると行っている整体から『梨状筋症候群』と言われた。

ネットで調べたら、ああそんな感じかも、と思ったけれど、言葉だけで言われれば、サッパリ解らなかった。

入院時に話を戻す事にする。

色んな科の先生が毎日病室に来た中で、整形外科の先生が私の折れた右足を触った時、

「いつてー！！！」と、先生に殴りかかったと聞く。

先生は笑いながら、「元氣がある事は良い事だ！はっはっは！」と病室を後にしたという。多分、事故後の開口一番はこの叫びではないかと思う。

リハビリの先生も回診に来ていたが、また痛い事をされるのでは？という恐怖から、

リハビリの先生の白衣を黒マジックで落書きした…らしい。

私の家は割烹料理屋をしている為、娘が事故に遭った事を知ってるお客様からは、女将である母を元気づけようと、気にしながらも注文を入れて下さっていたお客様もいらっした。

百年以上続いている割烹のお客様から注文があれば、例えば娘が事故に遭っていても『仕事は仕事』と、母方の祖母は孫の私もそうだけれど、祖母にとっては自分のこどもである私の母の事が心配で、

「ずっと病院に付きつきりしていると気持が参ってしまう。頭を切り換える為に仕事しろ。何も出来ないけれど、昼間の順子はばあちゃんがついている。」

と、まるで自分の仕事のように、毎日弁当持ちで病院に来てくれた。

ついていても何するわけでもないのだけれど、病室から一階のリハビリ室へ行って、リハビリする時もくっついて来て、一緒にリハビリをしていた。

病室に帰って窓から、ウチの割烹が見える。

夜電気が消えたのを確認すると、

『もうじき迎えが来る』

と祖母は思った、と言っていた。

付き添いにつれてくれた祖母は結構愉快なおばあちゃんで、

ベットで寝ている私の目線の先が、祖母の胸になる。そこに私の手を持って行かせ、

「ばあちゃんのおっぱいだよ」

と触らせると、私はフッフ、と笑ったという。

「この子、笑ってる！」

おばあちゃんのこの行為から、私は全看護婦の胸を触ったらしい(笑)

毎朝、病室を先生が回診に来られる。

その時、先生が記憶力を調べる為

「今日の朝ごはんは何が出た？」

と聞いていた。先生が来る直前迄、母や伯母は

「ごはんと味噌汁と漬物と煮物とヨーグルト」

と何度となく言って聞かせたのだが、先生が来た時に私の口からは

「ごはんと味噌汁、あとなんもない」

記憶力が悪いというか、覚えようという気が無かった。

食事が終わり、母から歯ブラシを持たされる。

私は、持たされた歯ブラシが何をするモノか解らなかった。

歯ブラシで髪をとかした。まわりは笑っていたけれど、ウケを狙う為の行動ではなかった。本気で解らなかった。『失認』である。

そんな私に少しでも頭を使わせようと、私の家の前に公文の教室があるので、母は小学生低学年の公文の問題集を買って、病院のリハビリがない時は公文をさせるよう祖母に言っていた。

：けれど、祖母は病院のリハビリが終わると「ひとやすみで昼寝しよう」と、母が言った事はさせなかった。祖母は私に【逃げ道】を作ってくれたように今は感じる。

事故後、私は『書く』事は出来るのだろうか？と不安に思った母は、紙とペンを私に渡し「なんでもいいから、何か書いてみて」と言った所、スラスラと

『ASKA』と書いたらしい。日本語でも、カタカナでもなく、ローマ字で『ASKA』

よっぽど書き慣れていたのでだろう(笑)

ソレを見た母は「日本語じゃない事を書いて：順子はバカになった！」と思ったと言っていた。

夜、仕事が終わった母が病院に来て、公文をしていない事が解ると、夜寝る迄公文をさせられた。それが私には苦痛だったが、公文が終わると、まだ歩けない私を車椅子に移し、地下の売店で欲しいジュースのお金をピツタリ小銭袋から出す事が出来れば買ってよし、と何から何迄頭を使うリハビリを実践でさせた。

そして、地下の売店から一階に上がった所に熱帯魚が入っていた水槽があった。

他は消灯している為、周りは真っ暗だけれど、熱帯魚がいる水槽の中は照らされており、自由に泳ぐ熱帯魚が光って見えた姿は今でもすごく印象に残っている。『自由に動いているな：』と自由に動く事が出来ない自分と比べ、『うらやましい』という気持を持ちながら、

ぼんやり見ていた。

その時の私は、ただただ一日一日を生きるのが精一杯だった。

発語もままならない、動けない身体。

私は、病院の天井を見つめあみだくじをしていた。

何処へ繋がるわけでもないのに…。

毎日毎日、天井を見つめゴールの無いあみだくじをしていた。

発語は先程書いたように「いつてー！」だったが、その後スラ言葉が出るには随分時間がかかった。リハビリの訓練士さん達は、どうにか私から発語を促がそうと色々な質問をした。その中のひとつの問いに、私の重い口は開いた。

「ひろゆき、ゆうぞう」

兄弟の名前だった。

訓練士が、いくら父母の名前を聞いても、口を開く事はなかった事に母はショックを受けていた。

兄の博之は家業の跡取りとして家に居たが、弟の裕三は大学で東京に行っていた。

私の事故は、弟の大学のテスト間近という事で、両親は告げないでいた。

：が、夕方の県内ニュースや、地元の新聞にも載る程の大きい事故だったので、弟の友達から弟に私の事故の情報は行ってしまった。

意識は戻っても、私が口からモノを食べず、点滴のみで生かされていた姿を

「この状態から、もう一度食べれるようになった患者を私は見た事がない。

一刻も早く、手術しないと娘さんは死にますよ！○日手術の予定です。」

と医者から言われた。

医学の知識が無い家族は、ソレしか順子を生かす路がないのならば…と全員承諾した

姉の事故の事を聞き、東京から帰って来た弟以外は…。

「これ以上姉ちゃんの身体に傷つかせたくない」

と弟だけは手術を拒否した。

時期は夏

アイスの種類が沢山あった中で、一番栄養価が高いレディボーゲンを買

スプーンの端に、ほんの少しだけのアイスを食べる…というより、舐めた事から私の

【食べる】という事を目覚めさせられた。

アイスを食べたと聞いた母の友人は、バケツ一杯プリンを作って来てくれた。

そんなに作ってくれても、食べたのはアイスと同じようにスプーンの端にほんの少しだけ。

そのように、『ほんの少しだけ』を繰り返し、

病院の食事は食べないのでストuppとなっていたので、担当看護師から

「ほんの少しでもアイスやプリンを食べてるのだから、家からお粥を作って来て食べさせてる所を先生に見てもらえば、先生も胃の手術の事言わないよ！」

というアドバイスをくれた。

家で父方の祖母から、バイ菌があったらイケナイと、新品の鍋を買い、米からコトコトとお粥を作ってもらい、ソレを一口でも食べている姿を見た医者は、胃の手術の事は言わなくなった、と聞く。

スプーンの端にほんの少しだけ食べていた私の姿を見た弟は「食べれるんだろ？」と、嚥下等おかまいなしに、口に無理やり押し込まされた。あの時は本当に苦しかった。

手術を勧めていた医者は、私が食べている姿を見てから、【手術】の食事が取れるようになってから、私は自分の『口が閉まらない』事に気付いた。しかし、ソレが顔面麻痺の症状とは思わなかった。食べ物や口に入れる為に、自分の意志で口を開く事は出来るが、開けた口を自分の意思で閉める事は出来なかった。食べ物を口に入れたら、手を使い下顎を押して口を閉めていた。そうしなければ、食べれなかった。ソレが麻痺とは思わず、【生きる為】の術。自然と行った、自ら行った行動だった。食べ物と同じく、水分も必ずと言っていい程、口の端から少しこぼしてしまっていた。まわりに気付かれないよう、素早く手でこぼれた所を拭いていたが…。

この頃、加害者が病院に来た。
付き添いの親戚に「私が来た事をお母さんに伝えて下さい」と言って帰った。
はねた私に一言も無く…。
私は喋れなくても、『加害者が来た』という事は記憶に残した事を、加害者は知らない。

食事の時、自分の手の補助無く自らの意志で口が閉めれるようになったのは、いつぐらいいからだったか思い出せないが、神奈リハ一回目の入院の時、同室の子から「順ちゃんはお腹が痛い時、いつも手で押さえるけど歯が痛いのか？」と言われた事は覚えている。何気に出る疑問は時に残酷である。

『口が閉まらないから』とは悔しくて答えたくなかったから、覚えている
2001年11月はまだ口が閉められなかった、という事になる。

私が生死さまよったのはコレで二回目である。
一回目は、三歳くらいの時に映画ドラえもんを観に行った時に肝炎にかかった。
同じ病室で、同じ肝炎にかかった子は亡くなったと聞く。
大学の研修医が仕事終わってから、私が寝てるか起きているかを確認して、よく遊んでくれた事は覚えている。

『生命力』なのか、まだこの世でやらねばならない事があるから生かされたのか。
この生死さまよう出来事に共通するのは【映画】だが、映画は今も好きである♪
感動する映画を観て、顔面麻痺で出ない涙が出るかもしれない、という淡い期待を込めて観に行っている。

このふたつの事から、
私が生かされた使命というのが一体なんなのか、
それがわかるのはもつとずっと先だろう。

④ ともだち

私が入院している病室には、学生時代・職場の仲間、友人知人と本当に大勢来てくれた。

一番最初にお見舞いを持って来て下さったのは、愛犬の散歩中に犬同志が仲良くなった事で、話をするようになったおじさんだった。

「順ちゃん！絶対良くなるから、夏になったらアルと青吉(おじさんの所の犬の名前)と一緒に海に散歩行こうな！」と、励ましてくれた。

意識不明だった私が、意識が戻ってからどれだけの友達が来てくれたか解るようにノートにメッセージを残してくれた。

一回だけでなく、何回も来てくれた友達もいた。

ノートに面会日と一言残してくれた。毎週のように来てくれた友達もいて「前回よりずいぶん元気になったね」と、違いを記してくれていた。友達は本当に本当にありがたい。

そして皆、私がチャゲアスのファンという事を知っているから、

「早く元気になって、チャゲアスのコンサートに行こうね！」

と励ましてくれた。

言っている事は理解しても、発語が出来なかった私は、チャゲアスの代表曲の♪ YAHYAHYAH のように、握りしめた拳を天井に突き上げ、行動で反応した。

高校の同級生で、不思議と気が合い、修学旅行で北海道・函館で新選組副長の土方歳三を知ってからお互い新選組を好きになり、よく一緒に京都に行っていた友達が居た。

そんなカノジョは、私が交通事故に遭った年に妊娠をした。

私が事故に遭ったのは聞いて知っていても、色んな菌がある病院に行き、おなかの赤ちゃんに影響したら…と、事故で運ばれたと聞いた時に病院に行って以来は病院に来なかった。

そんな時、カノジョの夢に私が出て

「最近来ないねえ？私、元気になったからたまには顔見せに来なよ」

と、私から言われた、という内容の夢。

目が覚めれば、見た夢はだいたい忘れてしまうが、その夢はカノジョが起きてても、不思議と頭にあった。

『順子の病室は面会謝絶な筈だけどなあ…』

と思いつつも、病院に向かったら、

私は意識が戻ったという事で、面会謝絶が解除されていた。

私は自分が意識戻った事をカノジョの夢に出て、知らせに行つたのだろうか？

見舞いに来てくれたカノジョと、何を話したかは覚えていないが、

大きくなったカノジョのおなかを触った事は覚えている。

そんなおなかの赤ちゃんも、今年は高校受験となる。

それだけ、時間が経つたのだ。

同じ時に学校を卒業したけれど、私だけルールがおおいに外れてしまったなあ…

その後、事故前の私を知っている学生時代の友達と、正直言うとあまり会いたくない気持

が大きくなっている事に気付く。
変わってしまった私を、変化を、障害を、悟られたく~~な~~なかった。

⑤ リハビリで通院(転院先探し)

意識が戻ってから、最初は車椅子だったが、車輪付きの歩行器をしばらく使い、手押し車を押して歩くのには時間がかつらなかった。

ふらつきがあった為、手押し車のかごに重さになるモノを入れていた。

手押し車が無くなつてからも、バランスを保つ為にわざと重い靴を履いて、それでバランスを保っていた。また、水を飲む時は必ずと言っていい程口の端からこぼしていた。今振り返れば、それが顔面麻痺の症状だったのだろう。

そのPLのリハビリで、ストローを使って吸い込むリハビリや風船を膨らますリハビリもした。

口周辺の筋肉が落ちていた為、ストローを使って吸い込むというリハビリは苦しくて好きではなかった事は覚えていてる。

リハビリを怠ったからか、口周辺の筋肉は今でも引きつるような感覚はある。

ああ、もっとマジメにリハビリちゃんとしてれば、今はもっと違ったのかもしれない。

また、足の筋力が落ちていた私に、筋力をつけるリハビリをしてくれた訓練士から、『イジメ』を受けていると勘違いした事もあった。考えが幼稚だった。

その頃の私にはきつかったリハビリの甲斐あってか、補助無く歩行出来るようになるのは結構早かった。そして、退院となり、救急搬送された同じ病院にリハビリ通院をした。

家から病院迄、ゆっくり歩いても徒歩30分もあれば着ける距離なので、リハビリを兼ね歩いて通院した。

その途中にある歩道橋：

いくらリハビリをしても良くなっている実感が全く持てなかった私は、

『もう一生リハビリをして、死んで行くのかな?』と思ったのだった。

病院に向かう途中にある歩道橋の上から下を走る車を見て、ココから墜ちた方が楽なのかもしれない』

と何回思った事か…。

希望も持てず、時間に取り残されている感じがして、メンタル的にも堕ちていた。

その気持ちにストップを掛けてくれたのが、大ファンのCHAGE&ASKAだった。

『死ぬのは簡単だけれど、もうじき発売の新曲を聴いてからにしよう。』

その新曲を葬式で流してもらおう』と迄考えていた。

新曲が出れば、次にアルバムが出る。

『死ぬんだったら、アルバムを聴いてからにしよう。』

死のうと考えていた私の気持ちは、チャゲアスの活動でどんどん先延ばしにされ、気がつけば、私は随分良くなっていた。

私はチャゲアスに生かされた、と言っても過言ではないのかもしれない。

この時の私は、リハビリをする事が仕事のようなモノだったのだが、家業の手伝いも少ししていた。【高次脳機能障害】の『易疲労性』の症状があり、非常に疲れやすかったのも、一時間から始めた。する事は身体にしみついていたので、解っていた。お客様のスリッパ並べは、頭の運動にはとても良かった。しかし、すぐ疲れてしまうので、疲れを感じると、横になって15分でも寝た。その15分でも、楽になるモノだった。そして、繰り返す内に疲れにくい身体になって行った。

そんな時、両親と脳外科の川崎先生と郡病院のリハビリ担当者で、リハビリ専門病院を探して

柏崎刈羽総合病院は、柏崎では一番大きい病院だが、事故のリハビリの専門病院ではない。交通事故の専門のリハビリ病院を、両親は探していた。

私が住む新潟県の隣の長野県に鹿教湯リハビリがある。私と同じ高校の同級生が、高校卒業間近に事故に遭い、彼は鹿教リハビリでリハビリをした、と聞いたのでそこも案に入れて考えていたが、鹿教は24時間家族のサポートが必要だった。そして、時期はこれから冬に向かって行く季節。

川崎先生は

「長野だったら、隣の県だから車で行けない事もないが、これから冬に向かい道路状況が悪くなる。隣の県だから行けなくないと、仕事で疲れている身体で長距離運転すれば、二次災害三次災害が考えられる。鹿教湯だったら紹介状は書かない。」

と言われた。

そして、郡病院のPT、OTと両親が相談し、決めた所は神奈川県民しか入れないと言われている『神奈川リハビリテーション病院』だった。

それから、何度か郡病院のケースワーカーが神奈リハに電話したが、病院のケースワーカーでは取り合ってもらえなかったのも、母が神奈リハのケースワーカーに直接直談判した。そして、なんとか外来迄こぎ着けた。母が娘の身体を良くしたい一心で。

⑥ 神奈川リハビリセンター

2001年10月24日

母の執念でなんとか外来迄こぎ着け、神奈川リハビリセンターの外来診察に行く事になった。

体力がない私を考え、バスの運転手をしていた叔父さんから、仕事を休みとってもらい、母と私と叔父さんと伯母さんと、一路神奈川へ向かった。

朝1.の外来の為、叔父さんが探してくれた神奈リハ近くの七沢荘で前泊した。

その宿に入った時、亭主から「おねえさん、どうしたの？」と声を掛けられた。

私は一応普通に歩いているつもりだったので、どうしてそんな言葉を掛けられたのか不思議だった。そして別れ際「大丈夫、治るよ！」と言われたのは、もっと不思議だったが、不意に掛けられたその言葉は有り難かった。

七沢荘には東京の大学に行っていた弟も来て、ボタン鍋を食べた…のは覚えていられるけれど、

私の口には合わなかった(笑)

七沢荘の亭主から氣功をしてもらった。

何処に効いているか解らなかったが、すごく痛かった事しか覚えていない。

七沢荘に泊まった翌日

いよいよ神奈川リハビリテーション病院の外来診察へ。

セブンイレブンの角を曲がり、坂道を上った所にある大きい病院。

受付をして、外来診察室へ。

その時、外来の先生から開口一番に言われた言葉は

「何しにここまで来た？」

だった。

母は泣いた。娘を治す為に遠路遙々神奈川迄来たのに、そんな事を言われるなんて…。

外来室から母は追い出され、その先生と私は少し話をしたが、何を話したかなんて、今となったら全く覚えていない。

そして、再び母が呼ばれた時

「じゃ入院してみるか」

と、何がどうなったか解らないけれど、めでたく？入院する事になった。

新潟から遠く離れた神奈川。

私がいなければ、アルの散歩は誰がするの？ごはんは誰があげるの？

私は、新潟から…家から離れたくなかった。

苦労の末、神奈川に決めた母に「そんなに良い病院なら、お母さんが入ればイイじゃん！」という言葉を投稿して抵抗したのだった。

外来診察を受けた約一か月後の2001年11月29日入院となった。

散々抵抗したが、ココがこれからの私の人生の大きいターニングポイントだった、と今振り返れば思う。ココで主治医を担当して下さった先生が、それから縁続いて行く橋本圭司先生。

小さかった時にかかった肝炎の話の時に出した研修医もそうだが、

医者と患者の合性もあると、私は思う。橋本先生とは気が合った…と、勝手に思っている。

多分、先生が合わせてくれたんだと思うが(笑)

初対面の時の橋本先生の印象は、失礼かもしれないが、まったく覚えていない(苦笑)

この頃の私は、記憶障害の症状がまだまだ大きかった、という事にしておこう(笑)

その後も、不思議な事に橋本先生とは縁続いて行くのだが、その話はまた追々と。

ここで出逢えたのが橋本先生だったから、私はここまで良くなれたのだと思っている。

感謝

今、

「何処でリハビリしたの？」

と聞かれれば、

「神奈川リハビリで、あの橋本圭司先生が主治医担当してくれたんだ♪」

と、自慢して答えている事を先生は知らない。

話は変わるが、私は靈感はないのだが、神奈リハに入院した頃見た夢で、私がハタチの時に亡くなった曾祖母が出てきて、

「西の方に宝が埋まっている」と言った言葉だけは起きてもハッキリ覚えていた。訓練が終わってから、ウチに電話して父に

「西の方に宝が埋まっているって、シズバあちゃんが夢で言っていたから、西の方探してみて！」

と言ったら、父は

「ウチから西の方角が神奈川だから、おばあちゃんは『神奈川リハ』の事を言ったんだろう」と言っていた。

先程も記した通り、右足を骨折した私だったが、ある夜折れた右足を誰かが摩る感覚があった。ここの看護師さんは時間外にそんな事迄してくれるのか…、と思いながらも、【誰】が摩ってくれていたのか確認する勇氣はなく、怖かったので頭から布団を被って寝た。仲良くなったリハビリ仲間と話すと「ココ出るんだってー」と言われたが、摩られている時恐怖心はなく、「西の方角に…」と夢に出て来てくれた曾ばあちゃん。

亡くなったおばあちゃん迄もが、心配で様子を観に来てくれたのかな、と思う事にした。おばあちゃんが『宝』と言ったのは、『神奈リハ』なのか『橋本先生』なのか…。

しかし、遠方に行つての生活に戸惑いが大きかったのか、

一時は橋本先生から「新潟へ返します」と家に電話が行った、と後から聞いた。

一回目の入院時は…、ほとんど覚えていない。

神奈リハでの入院部屋は、女性だけの四人部屋。私は CHAGE&ASKA の大ファンで、同室の子で明日香ちゃんという子が居た。仲良くなるきっかけなんて些細な事から。そんな事から明日香ちゃんとは今も仲良く連絡取り合っている。

この頃私は、顔面麻痺の症状が強く、食べ物や口の中に入れても、自分の意志で口を閉じれなかった。

口を開ける事は出来ても、自力で口を閉める事が出来なかったのも、自分の手で口を閉めていた。

神奈リハの同室の子は手で顎を押している私を見て、神奈リハの同じ部屋の子は

「歯が痛いのか？」と聞いて来た。

顎を手で押していれば、傍から見ればそう見えても仕方ない

週の最後の金曜日になると、各自自宅へ帰って行き、気分転換をして日曜日の夕食時に神奈リハに戻って来る、という流れとなっていた。

私は週末毎に新潟へ帰れないので、身元引受人となつて下さった相模原に住む母の友人のお宅へ毎週末お邪魔していた。

事情は聞いても、友達のこどもを毎週末預かるなんて出来る事ではないと思うが、快く引き受けて下さった母の友人一家には今でも頭が下がる。

そこのお宅はバグ犬を飼われていて、大好きな私はすごく心癒してくれた。

神奈川リハビリセンターのリハビリは、学校の授業のように組まれていた。そして、リハビリと言わず【訓練】と言った。

地元の郡病院でもあったPT(理学療法)、OT(作業療法)、心理の他に、体育・就職した時の事を考え職能とあった。

PTでは、映画やドラマになった『リットルの涙』の主人公が四つ這いになって筋トレをしていたのを覚えているだろうか？あんな感じの動作の訓練をしたり、OT(作業療法)では、パズルをしたり、工芸作品を作ったり、料理を作ったりした。二度目の入院では、車の運転のシミュレーションをした。

訓練の空き時間には、電話で母方の祖母に連絡するのが日課となっていた。親とひとつまたいでいるおばあちゃんだから、色んな事を話せたと思う。

今考えれば、私から電話が来ると思い、何処にも出かけられなかったな…と、申し訳なく思う。

また、神奈川リハビリで、橋本先生から『障害者手帳』を診断された。

それは、私にとって非常に非常に悔しい事だった。プライドをへし折られた。

…という事は、【障害者】に対する偏見があったのか？

イヤ、【障害者】に対しての偏見ではなく、『高次脳機能障害』という、よくわからない障害に偏見があったのだと思う。

パツと見、健常者と一緒なのに、解らない人にどう説明すれば？

障害者手帳を持っても、悔しかったから、年単位で使わなかった。

使いたくなかった。

使わないという事は、診断された障害を認めない事になると思ったからだ。

診断されてからも、抵抗をしていた。

⑦ 事故前に申し込んだコンサートのチケット

神奈川リハビリセンター、通称神奈リハに入院してすぐ12月となった。

新潟と違い、関東は寒さはあっても雪が降るような冷えではない。

訓練が終わり、いつものようにおばあちゃんに電話しようと、携帯の電源を入れると、母から留守電が入っていた。

母に電話をすると「ASKAからチケットが送られて来た！」

と叫ぶ母。

なんのこっちゃ？と不思議に思いながら、落ち着いて話を聞いたら、12月27日 NOT AT ALL ツアー新潟県民会館のチケットが届いたと言う。

事故に遭う前の春先に私が申し込んでいたのだが、キレイさっぱり忘れていた。

「リハビリで神奈川に居て行けないから、行ける人に譲って行ってもらおうよ」

と、リハビリ重視の母からの確認の電話だった。

しかし、主治医である橋本先生に話したら

「少し早い年末休みで新潟へ帰って、医学以上のパワーをASKAからもらっておいで」

と、新潟へ帰してくれた。

事故から5か月しか経っていなく、骨折した右足にはボルトが入っていた為、歩くと足の肉と金具が当たり(こ)すれて(こ)痛かった。けれど、自分が好きなモノ(望むモノ)を観に行くとなったら、そんな痛みなんて大した事ない。メンタル復活だった(笑)身体は追いついていなかったけれど、気持はウキウキで新潟へ帰省した。

帰宅し、家でコンサートの予習(笑)をしようと、前のコンサートのDVDを見ていた時だった。「あれ？なんか聞こえ方が変だ」と、初めて自分の身体の異変に気付いた。

右耳をテレビに近づけた時と左耳を近づけた時では、明らかに聞こえに差がある事に気付いた。

適切な説明ではないかもしれないが、左耳から聞こえる音がぼやけて聞こえる。

コンサートが楽しみで神奈リハから帰省したけれど、こんなにも身体が変わっていたなんて…

記憶の方もおぼろげで、あまり覚えていない事が多く、私の口癖は「はて？」だった。とにかく、新しい事は覚えられない事が多かった。

普段は、人の話を相対して両耳で音を聞いている時は、そんなに『聞こえ』を気にした事はなかったが、神奈川から帰省して迄参加するコンサートなのだから、万全の状態を楽しみたい！と、事故前からかかりつけていた地元の耳鼻科に行った。

その時、『聞こえ』の検査をしていただき、先生から

「何処かにぶつかりましたか？」と言われた。

事故前の『聞こえ』の検査記録も残っており、郡病院でも神奈リハでも出来なかった、事故前の状態と比較する事が出来た。

年令を重ねての聴力の落ち方ではない事は明らかだった。

ハッキリと結果が出た聴力の結果に、私はものすごくショックを受けた。

郡病院でも、神奈リハでも検査したが、比較するモノが無かったからだと思うが、専門の所なのはどうして気付かなかった？と怒りにも似た感情を覚えた。

しかし、聞こえ方が悪くなったとしても、今聞こえているのが私にとって【当たり前】であり、何がどう聞こえにくくなっているか、まわりは解らない。

止む事の無い耳鳴りを通して聞える音。ぼやけながらも(適切な言い方ではないのかもしれないが)聞こえている。

耳鳴りで一番困るのは、寝る時。

明日も仕事だから早く寝たいのに、耳鳴りが気になって眠れない、という時がある。

そんな時、CDショップで見つけた『究極の眠れるCD』

この音楽には、気持を鎮静し緊張した身体を緩和させるリラクゼーション効果がある、とあり、確かにこの音楽を聴いていると心が落ち着く。

歌手の音楽より、コッチを聴いている方が今も多い。

また、視力にも問題があった。

事故時、私は目が悪くコンタクトをつけていたのだが、事故で後ろからの強い衝撃ではねられた時、片目のコンタクトが目から吹き飛び無くなっていて、と後で聞く。

まるで映画『マスク』みたいな感じだったのだろうか？

視力は乱視が入っても、それを補う眼鏡やコンタクトをすれば良いだけだが、

これから行くコンサートは、神奈川から帰って来て迄参加する、私にとつて大切なコンサートなのだから、絶対楽しみたい！

その時、数々の変わってしまった自分の状態を認識せざるを得なかった事が、悔しかった。

しかし、耳も目も不調があると誰からも解ってもらえない。解ったところでどうサポートをしてもらえる？

自分が強く生きねばならない、と思つたきつかけだった

事故後、初めてのコンサートで大音量で奏でる音に、圧倒されてしまっていたが、全身に響く音に立っていれず、ほとんど座って鑑賞せざるを得なかった。

自分の体力の無さを実感させられ、悔しかった。

声援を送る声も、蚊が鳴くような声しか出せなかった事が悔しかった。

いつも一緒にコンサートに行く友達からこう言つた

「事故の後、まだ意識が戻っていないとき、

意識が戻ったばかりでまだ話せないとき、

チャゲアスのコンサートに行くつてリハビリを頑張っているときを見て来たけれど、新潟のコンサートに行けるようになるとは、正直思えない状態だった。

ASKA にまた逢いたい、またコンサートに行けるようになりたい気持ちで、こんなにも大きな力があるんだ」

と…。

そのコンサートのDVDもあるが、見るとその時どれだけ身体が辛かったかが鮮明に思い出されるので、あんまり見たくない。その時の身体の辛さを思い出すから…。

けれど、この時 CHAGE&ASKA のコンサートへ無理にでも行つて、チャゲアスから逆に励まされた事は絶対忘れない。2014 年覚醒剤で ASKA は逮捕されるが、私には彼の音楽で救われた、と今も思っている。

身体面で、右足が骨折してボルトが入っている痛みより、長時間立っている事が出来ず、ほぼ椅子に座って鑑賞せざるを得なかった事が悔しかった。

長年ファンをしているけれど、座って観るのはバラードを聴いている時くらいだったので、すごくすごく悔しかった。

大好きなチャゲアスを目の前にして、いつものように楽しめない自分が、ものすごく悔しく、その時もっとリハビリを頑張つて、次のコンサートの時はもつと楽しめる身体に絶対なつてやる！と、チャゲアスのお陰でリハビリ意力に火がついた。

そして、この神奈川リハビリセンターで橋本先生から【障害者手帳】の診断書を書かれた。自分の障害を認めていなかった私は…すごく悔しかった。

本当は、救急搬送された地元の病院の時にもこの話はあったと聞かすが、親としても認めたことなく手続きをしていなかった。

健常者で産んでくれたのに、障害者になつてしまつてごめんね。

私自身その事を受け止めれず、使わなければ障害を受け入れた事にならない、としばらく

使わなかった。イヤ、使いたくなかった。障害を認めたくなかった。それは『病識の欠如』という症状だった、と今なら思う。

NOT AT ALL ツアーの新潟公演と同じ日に発売されたアルバム NOT AT ALL を年明け、神奈リハに戻った時、訓練が無い時はベットで繰り返し聴いていた。その歌が、まるで自分に言ってくれているような感じがして…

NOT AT ALL

脱げないシャツのように 張り付いた日々で
見上げた空 浮かぶ風船 風に耳打ちされて 行く先を決めたみたい
誰の手を放れて来たにしろ 上手く選べない僕を追い越して
いいさ描いた絵を 何度でも直す手を僕は持とう not at all
そこに立ってそのときわかることばかりさ 今の僕にはない答えなんだろう 何かだろう
悪いことばかり考えていると心はひとつの色で塗られていく
いつもどれかひとつを どこかひとつを ぐぐり抜けて来ただろう not at all
そこに立ってそのときわかることばかりさ それが自分と思えたら軽くなる 歩ける
人混みで止まって空を仰いだ時 何だか理由もなく すべての真ん中に立ってるって思えた

そこに立ってそのときわかることばかりさ 今の僕にはない答えなんだろう 何かだろう
そこに立ってそのときわかることばかりさ それが自分と思えたら軽くなる 歩ける
神奈リハ退院予定の時、遠縁のおじいさんが亡くなり、迎えが数日遅くなった。
やっとやっと新潟へ帰れる、と楽しみにしていた気持ち壊された感があり、寝込んだ。

延期された数日間、私は食事もとらずリハビリもせず、病室のバットに引きこもっていた。
その時、看護師ではなく、橋本先生自ら来て
「水は飲んで」

と、水を持って来てくれた。

看護師が食事を持って来ても、手をつけなかったけれど、
先生が持って来てくれた水だから、飲まなきゃかな…と、
久しぶり口にした水は、すごく美味しかった。

退院出来る、と楽しみにしていた私の気持ちと
止む負えない事情で退院が延期となった事のショック。

気持ちの整理がつけられないのも、高次脳機能障害の症状だったと思う。

先生は、あの時私をどのように見ていたのだろうか。

数日遅れて、母と叔父さんが迎えに来てくれた。

気晴らしに…、とお台場ビーナスフォートをまわってくれた。

事故の前、pierrotというバンドのライブで、ZEPP 東京へ行った経験があった私は、
ビーナスフォートの所に、ペットショップがある事を言った。

当たった♪

事故後の記憶は忘れやすいが、
事故の前の記憶は、忘れていない証拠だった。

⑧ お菓子作り

私は、おんなのこだけれど、事故に遭う前はお菓子作りに興味はなかった。
ホットケーキが作ればイイ、くらいの気持ちでいた。

事故後、何かに興味を持つてもらいたい、と母は私に色々な事を提案した。

いくつか提案した中で、母と仲良しのご近所さんから教えしてもらったお菓子作りが、私は楽しかった。お菓子作りは、色々な材料の分量がちよつとでも違うと、美味しくなくなる。楽しんで出来るOTのリハビリだった、と思う。

手を使い、頭も使う。

事故前から、お菓子作りが好きだったら、こんなに興味が持てなかったと思う。
ほぼ毎日、色々なお菓子を作りに行くのは、9章の長野のお寺に行く迄続いた。

⑨ おさえられない感情

退院時の様子でも少し書いたが、自分の感情が自分で抑えられなかった。

交通事故は、自分が悪い訳ではないのだが、突然変わってしまった自分を、自分で受け止めきれないでいた。

私は常にイライラし、感情が抑えられなかった。

感情が抑えられない時、他の人に八つ当たりをしてしまう自分が、自分で嫌だった。
そんな時、私は部屋に引きこもり寝る事にした。

少しでも寝て起されば、少しは気持はおさまるからだった。

どうして、私はこうなってしまったんだろう…

これが、『高次脳機能障害』なのか。

身内や友達、色々な人を傷つけた。

変わってしまった自分を、自分で認めたくなかった。

悔しい！悔しい！

悲しい…けれど涙が出ない。

私はどうなってしまったのだろう…

気が狂いそうだった。

同級生とは明らかに歩んでいるレールが違う。
ひとりだけ置いてけぼりにされた感じになった。

ワケのわからない病名をつけられた自分を、見られなくなかった。

ひとりになりたかった。

：そういえば、何年か前にお客さんで来たお寺さんが、住み込み修行に来ないか？
と言っていた事を思い出した。

⑩ 長野のお寺に住み込み修行

車の運転許可をもらう為、神奈リハに2度目の入院をする前に、
気持を：精神を落ち着かせておきたく、自分からぞ望んだお寺の修行。

年単位で前になるが、母がウチのお客さんのお寺に住み込み修行しに行かないか？と言った事を私は覚えていた。

私は母に「お寺行こうかな？」と言った。

何年も前の事を突然言われた母は、頭に？が飛んだと言う。

自分が悪い事故ではなく、突然奪われた健康な心身と車の運転。

心身はこれからリハビリで取り戻すとしても、車の運転は絶対に再入院で許可をもらいたかった。イヤ、絶対もらってやる！

その為に、気持を落ち着かせておこうと思い、今までの生活と全然違うお寺修行を望んだ。
市内のお寺だったら、辛かったら帰るかもしれない、という甘い考えを消す為に、遠くのお寺を望んだ。

ウチのお客さんで、長野県のお寺さんがいらっしやるのだが、もし私が長野のリハビリ施設と決まった時は、コチラのお寺さんが身元引受人となつて下さる予定だった、と後から聞いた。

住み込み修行をした初日に、住職さんと奥様から「今日は半殺しだから」と言われ、ごくビックリしたのは今も覚えている。

事故で一回死んで、長野に来て今度は半殺し？

住職様と奥様は笑いながら、半殺しの説明をして下さった。

『半殺し』というのは、長野のお米の潰し方で、半殺し↓おはぎ(牡丹餅)で、皆殺しはお餅、と知った。

朝のおつとめを住職さまと一緒にして、その後奥様と朝ごはんを一緒に作り、境内の掃き掃除を主にした。

広い境内を、ちょうど桜の時期だったので、舞い散る葉をせつせと掃いた。

次の場所を掃いて、振り返ると最初に掃いた所が何もしていなかったかのように、葉が積もっている状態を見た時は、悲しくなった所もあったけれど、キレイな境内にして、檀家さんにいらしていただきたい！という気持ちの方が大きかったので、いちごっこのように、掃き掃除を繰り返していたのを覚えている。

また、お世話になっっている時、お寺の大般若法要が行われた。ウチの宗派は違うので、初めて見る大般若には圧倒と感動だった。

沢山来られる檀家さんの為に、お菓子を用意している、と奥様が言われたのを聞いて、地元でお菓子作りに行った経験が役に立てないかな？と、奥様に聞いてみた。

檀家さん 人来られるのに、10個シフォンケーキを作った。

作って、焼いてる間に、次のを作って…を繰り返した。

作りたてのシフォンケーキが出て、檀家さんはすごく喜んで下さった事が嬉しかった♪

また、時期は長野であんず祭りというお祭りがある頃だった。

あんずという花は知っていても、そのお祭りは私が住んでいる所にはなく、初めての経験だった。

桜と違い、白っぽさが強く感じた花が、満開に咲いているのを観た時は、圧巻だった。

忙しい中、他県から来た私の為に、気晴らしにあんず祭りに連れて行って下さった奥様には感謝でいっぱい。

県外の、お寺に3週間住み込み修行を受けて下さったお寺さんとは、今も親戚のようにお付き合いをさせていただいている。

⑪ カラオケ

高校時代、学校帰りによく友達とカラオケに行っていたので、カラオケは好きだった♪同じファン友とチャゲアスの歌を歌い、点数で月間チャンピオンになった事もあった。

しかし、事故で脳挫傷となった事で若干だが、私は難聴となった。

その事が原因か解らないが、耳から聞こえる音と自分が発する音の差があり、音がつかめないのは自分で実感していた。

そして、カラオケは嫌いになっていた。

私の近所に八十歳のおじいさんがいる。

そのおじいさんから、「カラオケに行こう」と、誘いが来るので無下に断る事が出来ず、事故後、おじいさんの誘いのカラオケは行くようになった。

事故後、最初は音がつかめなかったが、おじいさんからの月一回の恒例となった(笑)カラオケのお陰で、だんだんと音がとれるようになって来たような気がする。

⑫ 二回目の神奈川リハビリ

二回目のリハビリ入院の目的は、車の再運転が私は目的だった。二回目の入院の時も、橋本圭司先生が主治医になって下さった。

そして、前回の入院の時仲良くなった明日香ちゃんと前もって話し合い、同じ時に入院したので、また同じ部屋となった。

二回目となったら、私の気持ちにだいぶ余裕が出来、まるで修学旅行みたいに楽しかった。

病院の売店で欲しい商品が無かった時は、代表者が坂を下りたセブンイレブン迄買い出しに行き、消灯迄デールームでワチャワチャ楽しんだ。

また、二回目の入院で、同室となった明菜ちゃんとも、今も連絡取り合い仲良くしている♪

リハビリで知り合った友達は、それぞれ良くなりたい目標は違えど

『良くなりたい』という同じ志を持った仲間なので、私は『同志』と思っている。

二回目の入院となったら、だいぶ気持ちに余裕が出来たので

週末はタクシーで相模原のおばさんの家に行くのではなく、金曜の全リハビリが終わってから、八王子で大学生していた弟の所へ泊まった。

私の地元の新潟は、電車の線が二本しかない為、東京の電車の乗り継ぎには大変苦労した。何線の何行きに乗れば良いのか？あんなに線が沢山ある事が理解出来なかった。

…まあそれもリハビリだ、と思いながら、弟のアパートへ行った。

そんな時、橋本先生から「順子ちゃんーASKA再婚したぞー」と、かなりビックリされる事を言われる。再婚の前に、離婚もしていない筈だけど…と、チャゲアスファン友に確認してみると、再婚したのはCHAGEと解った。

関心ない人にとっては、CHAGEもASKAも同じ人となってしまうのだろうか(笑)

またもチャゲアスのコンサートの追加公演の横浜アリーナのチケットを入手する事が出来た。外出許可書に『チャゲアスのコンサートの為』と書いて、橋本先生に提出したら、「ついに病院もホテルがわりに使われるようになったか」と、笑いながら許可印を押して下さった。

久しぶりにシャバの空気を吸いながら(笑)

都会の空気にドギマギしながら、携帯を頼りに横アリへ向かった。

事故に遭った5カ月後に帰省して観たコンサートツアーの追加公演だったが、

あの時よりは、ほんの少しだけマシにコンサートの会場の雰囲気能耐えられる身体になっていた自分に気付いた。

もっとリハビリを頑張って、次のツアーの時はもっと楽しめる身体になってやる！という目標を持ち、リハビリを辛いと思わず頑張れた。

関東の電車に慣れていない私は、病院へ戻る予定時間になっても神奈リハに戻る事が出来ず、新潟の親にも連絡が行き心配させてしまった。

私はそんな事とはつゆ知らず、来る電車に乗れば良い、と思い

鈍行で神奈リハがある本厚木に向かっていった。

今でも東京行ったら、スマホで『乗り換え案内』を見ないと移動は出来ない(笑)

⑬ 車再運転

二回目の神奈リハ入院で、橋本先生から無事運転許可をいただいた。

「事故に遭って痛い目にあっているのだから、痛い目に遭わせないように！」と、強く言われた。

やっと！やっと！運転出来るのはすごく嬉しかった♪

免許はあったけれど、もう一度練習してから：車学(私の地元では自動車学校を略してこう呼んでいた)にも練習しに数回行った。

私が高校時代に免許を取りに行った時と、同じ教官がいたのでその教官についてもらった。

「新聞で事故に遭った事知ったよ。石黒さんには、車の運転を教える前に、歩き方を教えないとイケナイかな」

と、皮肉を言われながら(笑)練習をした。

免許証は高校3年の時マニュアルで取ったのを更新していた。

事故前はマニュアル車に乗っていたが、いつ車を運転出来るようになるか解らないので、乗っていたマニュアル車は、売られていた。

事故後、再運転許可を下さった時、橋本先生から

「マニュアルより操作が楽なオートマに乗って。」

と言われていた。

マニュアルとオートマの違いはあっても

懐かしい感覚の運転。

はねられたが、車対車の事故ではなかったので、車の運転に対して恐怖は無かった。

『元に戻る一歩だ！』

と、車を運転出来る事に対して、ものすごく嬉しかった事は覚えている。

橋本先生から言われた

「今度は自分が加害者にならないように！」

という言葉は、今も運転する時の私の心の中にある。

⑭ パン屋でパート

長い入院生活をして、沢山リハビリをして、車の運転も出来るようになり、元の自分に

戻ったように感じていた。身体もそれなりに動くようになっていたので、なんでも出来ると思っていた。

近所のパン屋が店員を募集していたので申し込んだ。
雇ってもらえる事になり、そこで【見えない障害】というモノを実体験で知る事になった。

『新しくモノを覚えられない』

バーコードがないお店だったので、全パンを暗記で覚えねばならなかった。
どんなにどんなに頑張っても、パンの名前が憶えられなかった。

店長から見れば、怠けているかバカなのかコイツ、と思われたと思う。

外見はなんともないが、私はなんにも出来なくなっちゃったんだ…
と、落ち込んだ。

その翌月のシフトに私の名前は無かった。

㊤ 2004年8月28日(土) お台場『熱風』

今までの文章の中でも何回かある歌手名が出ているが、
私が大ファンのチャゲ&飛鳥の25周年記念のイベントコンサートが、お台場で計画される事になった。

15.周年のイベントは富士急ハイランド3日間貸切って行なわれ、その時私は高校生だったが、夏休みを使いバイトをしてお金を貯め、もちろん参加した。

25周年はどんなイベントがあるんだろう？と、楽しみにしていた時の事故だったから、身体がどんなであろうと、もうじきあるチャゲアスの25周年記念イベントは絶対行く！とリハビリを頑張ってきた。

(記念イベント以外にも普通のコンサートは行っていたが…(笑))

自分が観たいコンサートのお金を、障害者年金で買うのは嫌だった。

そんな事をしたらファン心理で、アーティストに：チャゲアスに申し訳ない気がした。
自分が稼いだお金で観ないと楽しめない、と思った。

頑張って働いて、貯め、電話予約でチケットを取った。

自分が働いて稼いだお金で観ないと、心から楽しめない気がしたから。

いつも一緒に観る相手の分と、二枚なんとかチケットを電話予約し、

27日(金)の夜行バスで、いつものように東京へ向かった。

相手は仕事があるので、現地集合となった。

28日早朝池袋にバスが着く。大阪のファン友と話し合っており、車で大阪から来ていた友達から拾ってもらい、北海道の友達が飛行機で来る羽田空港へ向かいに行った。

北海道の友達を乗せた飛行機が羽田に到着し、友達を乗せ一路イベント会場のお台場へ。

この時、私は事故を経験し、障害がある事は誰にも言っていないかった。チャゲアス仲間と居る時は、『障害』とか関係ない気がしたから、言いたくなかった。

お台場野外特設会場に着いた時には、いよいよ雨が降り出した。

入場待ちの時は傘をさしていたが、入場はチケットのブロック毎に入場した。

入場したら傘は禁止だったので、傘を閉じて雨がっぱで雨をしのいでいた。

入場して、しばらくしたら相方から電話があり、野外なので近くの人に場所だけ確保してもらい、彼女のチケットを持って入場ゲートの所へ向かった。

相方を発見し、スタッフの人に「あの子にチケットを渡して下さい！」と言って、なんとか相方は入場する事が出来た。

夕方となりかかった時、開演。

デビュー曲の♪ひとり咲き から始まった時は鳥肌モノだった。

チャゲから「(天気が)もったね!」と言っていたが、イベント中雨は降って来て、雨がっぱをかぶり楽しんだ(笑)

この時、本当に「助かって良かった!生きていて良かった!」と心底思い、神様に感謝した。

このイベント時はちょうど台風がふたつ来ていて、途中から雨風が凄かった。

真夏だけど、お台場の海よりという事で寒かった記憶があるが、台風に負けないくらいファンの熱気は凄かった。

神様が、リハビリを頑張った自分にご褒美をくれた気がした♪

これからも頑張ろう!

⑩ 平成17年建設会社へ障害者雇用で建設会社入社

平成17年4月 職安の紹介により障害者雇用で、事故後パートではない仕事に初めて就いた。

事故前に勤めていた会社で、総務部に所属していた、という事もあってか総務部に配属された。かかってくる電話対応、来客対応、とする事は事故前の会社でしていた事と同じだったので、身体が自然に動いた。

忘れていなかった事が嬉しかった。

しかし、パツと見何処にも障害があるように見えない私に、

社内の人から

「何処に障害があるの?」

と、何人かに聞かれた。

人間は、まず目に見える事に異変があるかないかで、まず判断する。

例えば障害雇用と聞いている人が、見る感じ足が不自由と解れば補助しよう、と思う。手が不自由と見えるなら、荷物を持つ事を手伝おう、と思う。

しかし、私は目に見える状態には、何処かに不自由があるように見えない。では、この人は一体どうして障害者手帳を持っているのだろう？と疑問が出る気持は、解る。解るけれど、では【高次脳機能障害】と言えば、解るだろうか？

受け入れてくれるだろうか？どう説明して良いか解らず、答えに困り、橋本先生に何回聞いた事か…。

この時、私は自分に顔面麻痺がある事を解っていなかった。

視力と聴力が落ちただけで手帳を持たされていると思っていた。

自分に顔面麻痺がある事を随分前に聞いたのかもしれないけれど、忘れていた。

病識の欠如と記憶障害が強かったのだろう。

以前、近所のおばさんからお菓子作りを教えていただいた事から、スキルアップし、

この建設会社勤めている時、市の料理教室に2年通った。

仕事が終わった夜。3時間の間に作って食べて片づける。

まず、調理の前に食器を洗う所から始まる。それから、お米をとぎ、炊いている間に調理をする。メイン、副食、デザートグループの皆で協力しあって作った。この時も、私は障害の事を伏せて参加した。どれだけ自分が出来るか…試したかった。

自分に負けたくなかった。料理教室は2年続けた。3時間の間に全作業を終えねばならないので、戦争だった(笑)料理教室が終わって帰ると、クタクタだったが、気持ちイイ疲れだった♪

障害をもっている事は…他の人にはバレなかった。

⑰ なんだって出来るんだ！

建設会社の夏季休暇時、

チャゲアスの25周年イベント時から仲良くなった、北海道の友達に会いに北海道へ行った。障害を持つても、自分で飛行機を予約出来るし、北海道に一人で行ってくれば自信にも繋がると思った。(事故前でもひとりで飛行機に乗った事もなかったが(笑))

彼女とは2004年8月28日お台場で行なわれたチャゲアス25周年記念イベントの時に初めて会った。チャゲアスの記念イベントなのに、北海道のバスガイドをしている、と聞いたので、私は新選組の土方さんの事ばかり話して、まわりの友達からシラケられてしまったが、彼女に土方さんの函館のお墓まりに行きたい！気持を伝えていた。

その彼女を頼っての旅だった。

バスガイドの職業柄、素晴らし過ぎる旅行日程作って、送ってくれた。

私が住んでいる柏崎から、新潟市迄1時間半かけバスで行き、新潟空港へのバスに乗り換え、新潟空港へ行った。新潟空港から函館空港便は無くなったので、新千歳空港迄彼女に迎えに来てもらった。

高次くの症状のリハビリとしたら、規模が大きい最高の訓練の内容だったと今なら思う。

その時の私は、土方歳三のお墓参りが出来る事が嬉しく、向かって行っていた。

北海道着いた初日に、念願だった函館の土方歳三のお墓参りに連れて行ってくれた。それから、土方歳三と石川啄木の浪漫館という記念館に連れて行ってくれた。

こういう記念館があるなんて知らなかったので、本当に本当に嬉しかった！

土方歳三のお墓参りと共に希望していた、ガラス工房で自分でガラス細工を作れる、という事にチャレンジした。熟練職人の教えの元作った吹きガラス。私は顔面麻痺が残った為、頬を膨らませ、空気を送る事が出来にくかった。そんな私を、職人さんは上手に教えて下さり、なんとかコップが出来た♪何もかも私にとって、リハビリになっていたと思うが、その時の私は障害の事は頭に無く、とにかく楽しんだ♪高校以来に函館に行き、友達と写真撮った。

そして、意を決してその友達に、事故に遭い障害を負った事を話した。

中・高の時の友達と違い、事故後出会った友達だから、障害を背負う前の私は知らない。

彼女から返って来た言葉は

「その高次：なんとかは解らないけれど、障害を背負った後の順ちゃんしか知らないけれど、今の全部が順ちゃんなんだよ。」

障害や症状にこだわっていたのは私だったのだ。

【今の私】を受け止めてもらえ、本当に本当に嬉しかった。

その後、彼女の結婚式にも呼んでくれて、結婚先の福岡にも2回伺った。

チャゲアスが繋いでくれた縁。この出会いで私は色んな経験が出来、勇気が持てた。

今も大切な大切なともだち。

⑱ 祖母介護の為退職、父の死

建設会社で3年障害者雇用で勤めたE20年、同居していた父方の祖母が入居していた特養で転倒し大腿骨を骨折し、病院に入院となった。

先程も書いたよう、ウチは自営業をしているので、介護士がいない病院で食事介助をしに行く人がいなかった。

私が事故に遭った時に、祖母の身体に見つかった肺がんの処置を、私の状態が落ち着く迄待ってくれた、という恩を私は感じていたので、私は仕事を辞め、祖母の介護する事に躊躇はなかった。

朝、昼、晩と病院の食事の時間以外はウチの手伝いをして、食事の時間になると病院に行き、祖母と他愛もない話をしながら、食介をする日が続いた。

少し認知が入っていた祖母だったが、昔の話等をしながら笑いあっていた。

特養で転倒した時の大腿骨骨折の手術も決まり、

「手術終わって、施設に帰れば皆待つてるから、頑張ろうね！」

と言って励ましていた。

その直後、肺炎にかかってしまい身体が弱かった祖母は、そのまま逝ってしまった。

戻れると思っていた施設に祖母の荷物を取りに行った時、いつもの扉を開ければ祖母が

「順子さん、来てくれたのかい」

と笑顔で迎えてくれる祖母を思い出した。肺がんが直接的な死因ではなかったが、私の事故で肺がん治療を待たせてしまって、ごめんね、おばあちゃん。

私が20歳の成人式の晴れ姿を父に見せようと、父が入院していた病院に行った。その頃から父は入院を繰り返していたが、おばあちゃんの後を追うように、病を患っていた父は、祖母の死の半年後の3月2日に亡くなった。心配ばかりかけてしまった

⑲ 身体障害者手帳オープンで、病院事務

パン屋さんでの経験で、自分には『記憶力の低下』を身をもって経験した。それでも、働かない訳にはいかない。

職安に行き、私が事故で運ばれた病院事務職を紹介された。

橋本先生からは「恩返しのもりで」と言われた。

2008年(H20年)6月～9月迄、私が事故で運ばれた病院事務に就いた。

この病院事務でも、自分の障害を身を持って解る事になった。

沢山あるカルテの中から、求められているひとつを見つけられないでいた。

視力は、事故で乱視が入ったが、沢山あるカルテの中から探そうとすると、探し方を解っていない、探せない。待たせている人がいると思うと、尚更焦ってパニックになって行く。何をどうして良いか、解らなくなった。

恩返しをする事もなく、この病院事務はトライアル雇用期間終了で終わった。

これが、【高次脳機能障害】なのか…。

説明出来ない症状を自分自身体験し、ひどく落ち込んだ。

事故の前の私は、なんでも出来た訳でもなかったと思うが、本当になんにも出来なくなっただ…、と自分の症状がなんなのかわからないが、すごく困ったモノを背負ってしまった、と思った。

変わってしまった自分を、受け止めきれなかった。

死にたかった。

⑳ 障害者職業センター

祖母と父が亡くなり、仕事をしなければならぬ、という意識で職業安定所へ行った。

その前に主治医の橋本先生に相談したら

「障害者職業センターへ行ってみたら？」

とアドバイスをいただいた。その事を地元、柏崎の職安に話をして、『障害者職業センター』へアポイントをとってもらった。

2008年11月6日

空いている時間を作り、新潟市にある【障害者職業センター】に行った。

ココは職安が教えてくれた所だったが、私が住んでいる柏崎から新潟市迄、車で新潟市の場所にもよるが、中心部に行くのは交通状況にもよるが1時間半はかかる。

いくら、車の許可が出たと言っても、解っている市内の道を走ると違い、長距離運転と、一方通行が多い行き慣れていない新潟市内を、自分で運転して目的地迄行こうとは思わなかった。

【障害者職業センター】へは、柏崎市から新潟市迄高速バスを使い、新潟駅で新潟市内バスに乗り換え、向かった。

目的地へ行く為にどうしたら良いのか、というのはチャゲアスのコンサートに行く為に訓練されていたので(笑)苦にならなかった。

障害者職業センターとは、

障害者職業カウンセラー等を配置し、ハローワーク、障害者就業・生活支援センターとの密接な連携のもと、就職や職場定着、職場復帰を目指す障害のある方、障害者雇用を検討しているあるいは雇用している事業主の方、障害のある方の就労を支援する関係機関の方に対して、支援・サービスを提供している機関です。

ここでは、障害を持った自分に、合っている仕事とは一体何なのか？という診断をした。：まあ、診断結果と、今就いている職は違うが、その時担当して下さったカウンセラーさんは移動となりいらっしやらないが、引き継いで下さったカウンセラーさんに、今も仕事上の相談にのっていただいている。すごくすごく有り難く感謝している。職場よりの意見でもなく、当事者側の意見でもなく、全くの中立の立場として意見を言っ下さる。個人の意見だが、病院の先生は、医学に関して意見は言えるが、障害を背負っての仕事をした時の悩み等は、聞いてはくれるが、適切な意見やアドバイスをするのも限界があると思う。

私は、『身体』の事は橋本先生へ、『仕事』の事は職業センターへ、と使い分けて相談した。橋本先生もそれを望んでいた。

私自身もそうだったが、【障害者職業センター】の存在はまだまだ知られていないと思った。

障害を持ち、社会復帰を目指している方は【障害者職業センター】を利用する事をおススメする。

私が仕事をここまで続けて来れたのも、【障害者職業センター】の方からアドバイスをいただいているからだと思う。

㊦ 介護職員基礎研修課程からと介護員として就職

祖母の死後、通院と入退院を繰り返していたして父の通院の送迎をする中で、自営業の手伝いをしていたが、祖母が亡くなった半年後の H21 年 3 月、まるで祖母の後を追うように、長く病を患っていた父も亡くなった。

僅か半年の間に祖母と父が亡くなり、気が抜けてしまっていたが、それでも時間は過ぎ

て行く。

就職をしようと職安に行った時、高齢者が多い今、介護の担い手を増やす為

『介護職員基礎研修課程』という半年間の介護のテクノスクールの募集があった。

祖母と父の介護をした事と、小さい頃は3人の祖父母と同居していた為、お年寄りは大好きだった。

神奈リハで橋本先生から車の再運転の許可をいただいたので、車で隣の市の介護のテクノに半年通った。

生活している場所も、年令も違うクラスメイトとの、久しぶりの学校生活は、新鮮ですごく楽しかった。

私が事故に遭い、障害を負ってしまったという事を知らない中に居るのは、すごく久しぶりで楽しかった。元に戻れたのではないかと、と錯覚するくらいだった。

最初、テキストでの勉強の後、実習に入る事になった。

その時、再び障害をオープンにするべきなのか…悩んだ。

テキスト勉強の時、『高次脳機能障害』がテキストに載っていた。

…という事は、甘えだったのかもしれないけれど、解ってくれるのかもしれない、という期待もあった。

そして、実習生として市内の某特養に行った。

私が生まれた時はおじいちゃん、おばあちゃん、そしてひいばあちゃんと一緒に暮らしていたので、お年寄りと接する事に慣れていた。

どんな話をすれば喜ぶか、と解っていたので、利用者さんと接する会話は楽しかった。利用者さんに少しでもリラックスしていただきたく、受講した「タクティールケア」

を、介護現場ではじっくり腰を据えて施術する事は出来なかったけれど(多動な利用者様の見守りをしなくてはいけないので)手を握って会話をするだけでも、顔に笑み浮かべてくれた利用者様は今でも忘れない。

また、このとき『障害者職業センター』から、ジョブコーチの支援を職場が求めた。

② H26年2月愛犬の死 3月祖母の死

事故時、飼っていた愛犬アルの散歩をしていたのだが、私は跳ね飛ばされたが、アルの綱は放れ、無事だった。しかし犬の目線で主人が目の前で跳ね飛ばされた所を見てしまったのは、大変な恐怖だったと思う。

その後、散歩する時事故現場を通ろうとすると、全身でブレーキかけて歩こうとしなかったのを見て、相当怖い思いをさせてしまったんだ…と申し訳なく思った。

その後、14歳という高齢となり、ガタガタ震えを起こした。今、思い返せば震えではなく、痙攣だったのではないかと思う。その時の私は、寒く震えていると思い、アルの身体を毛布で巻き震えを抑えようとしていた。「痛い」とか「苦しい」と喋れないから、こっちが解ってあげなければならなかったのに…。

震えを発見した翌日、かかりつけの動物病院に行き、クッシング病というホルモンの病気を診断された。薬を処方してもらい、様子を見る事にしたが、高齢のアルに麻酔かけ

るMRIをするのは、クッシングの原因となる箇所の治療が出来るのかもしれないが、麻酔で還って来ない可能性がある気がした。アルがクッシング病を患ってしまったのは、目の前で私の事故を見てしまったからではないか？と責任を感じてしまった。

動けなくなっても、抱っこして一緒に歩いた散歩コースを歩み、同じ風を感じさせた。小さい頃からずっと、車庫の中に居て、道行く人から可愛がってもらっていた。具合が悪くなった時、一時家の中に居れたが、普段居ない所に移された事で、逆にアルは具合が悪くなってしまったので、元居た車庫に毛布を敷いて、カーペットを置き寒くないようにした。

アルが具合悪くなったのと時同じく、母方の祖母が入浴中病気が出てしまい、救急車で搬送された。

しかし、寿命には勝てず2月20日早朝、ゲージの中で亡くなってしまった。

発見した時、ゲージを噛んで口の脇を切って血を流していた。

私は吐血したのかと思っていたら、動物の葬儀屋さんが

「内臓が苦しいから、その痛みを超す痛みを作って意識を保とうとしていたのではないか」と言われた。

アルが寝付く迄一緒に居たのだが、ひとりで逝かせてしまった事には今も心が痛む。

14歳の中型犬なので、人間でいったら90歳くらいと言われた。

悲しんでいる時間はなく、しつかりアルを送った後、救急搬送された祖母の所へ行った。毎日、仕事が終わったら祖母の所へ顔を出した。

私が事故で入院していた時、弁当持ちで来てくれた恩があった。

毎日顔を見に病院に行ったが、3月29日祖母も逝ってしまった。

②③ 自分で始めたPT・OT・心理と歯科矯正

【PT】

事故で傷んだ身体を動かさず、そのままにしておく

良くなりもしないが悪いまま固まってしまうような気がしたので、

無理なく身体を動かそう、と思い行き始めたエクササイズ。

整体もしている所なので、身体に不調感じたらすぐ施術してもらるので安心してエクササイズが出来る♪何より、ウチから自転車で10分で着くという近さ！

この近さにエクササイズ出来る所があるから続けられている、と思う。私は恵まれている♪ほぼ毎日、三十分軽いストレッチに行っている。

また、月に1回総合調整で身体を整体で整えてくれる。

事故前の身体に戻る事は出来ないけれど、少しでも近い身体になれるように。

また『フェイスマッサージ』という手技もある。指圧で筋膜の調整を行う手法なのだが、痛みは無い。少しでも顔面麻痺に効いてくれれば、という願いを込め、別途お金を払い毎月依頼している。

このエクササイズで過ごす時間は、私が事故に遭った事を知らない人達と一緒に時間を過ごす事が出来るので、本当にのびのび出来て楽しい♪

このエクササイズは、自分で見つけたPTだと思っている。

【OT】

また、エクササイズと同じく、『事故で傷んだ身体を良くしたい』という気持ちから、【手を使う事をする、脳に反応する】と知ってから、手を使う【ナニカ】で、私が興味持てる事を探した。長野のお寺に行く前に、近所の人から教えてもらっていたお菓子作りも、間違いなくOTなのだが…。

その時、職場の隣に「陶芸教室」がある事を発見した。

陶芸か、した事ないから私に出来るかな？と、興味と不安が半分半分、「お試しコース」から始めたのが2014年9月20日。陶芸の先生は、「決まったモノを作らせる」ではなく、作りたいモノ・好きなモノを作らせてくれる。

そのスタンスが私に合った♪

自分が作りたいモノを制作している時は、いつもしている耳鳴りも気にならない。

耳鳴りが消えている訳ではないが、陶芸制作に集中しているから気にならないのだ。

仕事で嫌な事があっても、陶芸制作をする事でメンタル面も整えてくれている、と気付いた。下手の横好きで(笑)市の展示会にも出品させていただき、入選できた♪

最初から陶芸をしよう、と思った訳ではないが気付けば2年ちよい通っている。

この陶芸は、自分で見つけたOTと思っている。

橋本先生のクリニックでも、数々の陶芸作品を飾っていただいる。

先生が喜んで下さっている(多分…)他、先生のクリニックに来られた患者さんが同じ当事者である私を作った陶芸を見て、「自分だって出来るんだ!」と、思っていただければ、私としたら嬉しい限りである♪

また、陶芸作品を作っている時は、いつも気になっている耳鳴りがまったく気にならないでいる事に気付いた。職場で嫌な事があっても同じで、陶芸作品を作る事で

物事に集中する事で、頭の切り換えが自然に出来、忘れさせるのだと思う。

私にとって、【陶芸】との出会いはとても大きかったと思う。

自分の個性で作品を作っている、すごく楽しい!

また、歯科矯正を始めようと思ったのは、歯並びを良くする事で、ズレた身体が整う、と聞いたから、部分部分を治して行くより、頭のとっぺんから真っ直ぐにした方が早いと思ったからである。事故に遭ってから、無意識で奥歯を噛みすぎて歯がかけた事には自分でも驚いた。

また、歯科矯正をする事で、『脳の働きが活発になる』とあった。

元の自分に戻る事は出来なくても、努力を惜しまないでいたかった。

食べ物を食べた時、歯と歯の間に食べ物挟まるのではなく、歯茎と歯肉の間に食べ物挟まる事に困っていた。最初のPRのリハビリで風船を膨らませたり、ストローで吸い込むリハビリを頑張っていたら、今の状態は少しは変わっていたのかもそれない。

歯科矯正を始めたきっかけのもうひとつは、私は無意識に奥歯をくいしばるクセが出来たのだった。食いしばりが強く、歯がかけた事があった事は、自分でも驚いた。

他にも食いしばる事で影響が出る、肩こり・頭痛・腰痛を解消、軽減する期待がもてるとあったから、イイ大人がちびっこにまじって矯正歯科に通う路を選んだのだった。

【心理】

もうひと。自然音はヒーリング効果があり、ストレス解消になり、自律神経を整える。心理面を落ちるかせる為に、私は滝を観に行く事が趣味になった。

時間作って、今まで色んな滝を観に行ったが、去年は日本で一番の滝の那智の滝に行ってきた。ただただ流れ落ちて行く自然界の滝の流れを観ていると、自分が悩んでいる事なんてちっぽけな事に思えて来る。滝からパワーをもらい、私も頑張ろう！と思えるようになった。自分に負けない自分ではない！と思った。

自分の周りに興味持てるモノは沢山転がっていると思うが、ソレに自分が気づくか否か、だと思った。

私は、事故に遭った事は、人生180度ひっくり返す出来事で、非常に嫌な事だったが、事故に遭っていなければ、絶対に興味持たない事に触れた事には驚いている。

事故で脳挫傷をしてから、左耳の耳鳴りは、16年前の事故の時からずっとしている。

何が原因とか、どうすれば治るとか、本当に治るかどうかわからない事に労力を使うのなら、『慣れる』自分でいようと考えた。

眠る時、アロマのオイルを1・2滴アロマストーンに垂らし眠りにつく。

アロマの好きな香りは、人それぞれである。

私が好きな香りは「ローズゼラニウム」甘くバラに似た香り、わずかにミント的なグリーン調の香りがします。

効能・精神安定 精神強化 精神高揚 リフレッシュ リラックスなど

少しでも、自分で前に進めるように…

②④ 人の良い所を見るクセを…

自分が出来ないクセに、人の悪い所ばかり気になるようになって自分気が付く。

それではいけない。

嫌なことばかり言っていると、口が汚れる。

優しい言葉で、温度がある言葉と話していると、そういう人が集まってくれる。

言葉の力を借りながら、柔らかな心でいられたら、と思います。

②⑤ 事故から15年目に被害者の謝罪を受ける

事故に遭った7月15日には、毎年加害者はウチに顔を出し、謝罪と私の具合を聞きに来ていた。

私はずっと加害者を許せず、加害者と会う事を拒んでいた。

いつも加害者の対応をするのは、母だった。

私は、自分が生死さまよった事故があった7月が：

加害者が来る7月が大嫌いだった。6月の次が8月になればいいのと思うくらい7月が来る事が嫌だった。

第三者はどういう風に思うのか：事故の事を色んな人に話を聞いてみた。

ほとんどの人が、同情と慰めと励ましただったが、エクササイズのトレーナーと喫茶店のマスターは違った。

「事故に遭った時から、アナタの時間が動いていない。許すとか許さないとかではなく、自分の為に乗り越えてほしい」

と、エクササイズのトレーナーから言われた。

最初、この事を言われた時、私はすごく怒った。

同情や慰めを言ってもらえるのが当たり前と思っていた所があったからかもしれない。

喫茶店のマスターは、事故を起こした事があるからか、加害者の気持ちでモノを言った。

この二人の話より、事故から14年目の7月15日

加害者が来る事が解っていた私は、加害者に手紙を書いた。

会うつもりはない私だったが、今の私の気持ちを書いた手紙だった。

今、手元にあるが、今読み返しても攻撃的な内容だった。私の怒りがあふれていた。

★

加害者へ手紙を書き、加害者と接触をした一年後。

ついに加害者と会う事を決めた。

私はエクササイズで週一回ボクシングをしていた。

グローブをしてマットに当てて、という本格的ではなく、拳を作って空を切ると言うボクシングの真似事だったが、私には最高のストレス発散だった。

これがあったから、手紙の一年後、加害者の謝罪を受けよう、と思えたのだと思う。

悩みに悩み、色んな知り合いにも相談し、自分自身『いつまでもこのままじゃイケナイ』という気持ちの方が大きくなり、事故から15年目加害者の謝罪を受けよう、と自分で決めた。

その事を母に話すと、

「絶対許さない！」と言い続けていた私の口からそんな言葉が出たから、母はすごく驚いていた。

休日に、加害者の旦那と一緒に来る、と加害者は最初言ったらしいが、私は母に、「平日の夜」を指定し、旦那は関係ない。私をはねたのは加害者のアナタなのだから、加害者一人で来て下さい、と伝えてもらった。

私の習っているエクササイズのメニューで、ボクシンがある。加害者と会う前に、加害者を想像して拳で沢山殴った。

ボクシングがあつたから、加害者と会う気持ちになれたと思う。

また、いつまでも【憎い】という、真っ黒な気持ちを抱いたままにいる事に疲れていた。自分の精神状態にも良くない、と思った。

加害者の謝罪を受ける、という事は、変わってしまった今の自分を自分で受け入れるという事。

今の自分で踏み出す一步を、加害者の謝罪を受けるという事にした。

あの時、加害者が医療関係者で、救急車が来る前に適切な処置をしてくれた事に関しては、礼を言った。

それでも、あの時の自分と、今の自分と変わらない気持ちはひとつ

【今、いくら謝罪されても、事故前の健常者の私に戻る訳ではない】

謝罪は受けるが許した訳ではない。

私はこれからもアナタから負わされた障害と闘って生きねばならない。それは忘れないで。

あなたが毎年7月に来る、と思うだけで私の精神状態が乱される。

来なくなっても、7月は私自身苦しむのは変わらないが、

許した訳ではないが、謝罪を受けた事でほんの少しだけ、気持ちが軽くなった事は確かだった。

ある本で見つけた言葉がある。

【人生で最も難しいこと】

1. 許すこと
2. 忘れること
3. 信じること

②⑥ メール

事故に遭ってから、伝えたい気持ちを文にまとめる事が出来なかった。

メールにすると、いつも長文となっていた。

私はその事を「文才があるから」と思っていたが、

橋本先生の講演会を聴き、それが『症状』と知り、かなりショックだった。

今も、まとめられない。

それって、オカシイ事なの？

病識の欠如か…

②⑦ 認めたくない顔面麻痺

加害者の謝罪は受けたけれど、

変わってしまった自分と直面し、悲しくなる事もある。

身体的に言えば、気候の変化…というより、気圧の変化で頭痛が起きる。

その他の身体症状と言えば、折れた右足の足の付け根が痛くなる時がある。

痛みが生じた時は、薬を飲むとかではなく、エクササイズに行っている所が整体もしているので、そこに行っている。

もっと大きい身体症状と言えば、いくら悲しくても涙が出ない。左の耳鳴りは止む事はない。口角の動きは悪いまま。

水を飲むのは、こぼさなくなったが、食事をして咀嚼すると、今も歯茎と歯肉の間に残さ物が残ってしまうのは変わらない。

…悲しい時に涙が出て、耳鳴りもなく、ちゃんと口の動きがあった時の、事故前の自分が思い出せない。

認めたくない。認めたくないけれど、何食わぬ顔を装っている。

だって、見た目でわからないじゃない？

不自由な所を言い並べ、語っても本当に解ってはもらえない。

ならば、言わない方がいい、と私は貝になった。

解ってもらえない症状を背負ってしまったも、生きているのが今の私。

時々、どの症状が『顔面麻痺』なのかすら解らなくなる。橋本先生に何度となく聞いている。医学的には【症状】でも、だって私にとっては【普通】なんだもん。

認めたくないけれど、これが顔面麻痺なのか…。

認めたくないけれど、私にとっての『普通』が【症状】と認めている。

理解する事で、これから生きて行く為に。

ねえ、先生、

私いつ治るの？何をすれば元に戻るの？

…なんて、答えがわかっている事を聞かないよ。

私らしく、今の自分で生きて行くから！

エピソード

事故から16年経ち、事故に遭う前の：

こんな言い方は嫌なのだけれど、健常者だった自分が解らなくなっています。健常者とか、障害者とか、そんな分け方に拘るのではなく、

『今』の自分を自分で受け止め、前に進んで行くしかない、と思えたのです。

確かに、どうなるかわからない未来は、非常にコワイです。

でも、怖がついていても先に進めないと気付いた時、逆に、今を楽しもう！と思うようになりました。

私は割り切れる迄時間がかかったし、何度も逆戻りをしました。

いいじゃない

『今の自分』が、他の誰でもない自分と気付けば。

今の自分を認める勇氣。

自分の人生は、自分で選ぶことができる。

自分の心が無理をすると、自分らしさを失ってしまう。

氣にすぎると、傷つくし、氣にしなすぎると、失ってしまう。

泣いた今日より、笑ってる明日

後悔した今日より前向きな明日

辛い事や悲しい事は、楽しい明日のためにある

良くも悪くも【過去】は【過去】

時計は巻き戻せても、時間は戻らない

みんなにいい顔をしようとする、自分が気づかない内に心に無理が来ちゃう。

「大丈夫！」と思う事が大事、と気付けば歩き出す事が出来るから。

参考文献

高次脳機能障害 橋本圭司著 2007

幸せになる勇氣 岸見一郎 古賀史健著 2016

大丈夫だよ、すべてはうまくいっているからね 斎藤一人 2015

ASKAさんへ

文中に何回も名前が出てくる、歌手の ASKA。
執行猶予中の ASKA の名前を文中に出す事は、すごく躊躇があった。
世の中の賛否両論あるなら、ASKA に対して『否』が多いと感じています。

逮捕される前からのファンだったけれど、ASKA が一度目の逮捕の時は、ものすごくショックで、しばらく歌が聴けなかった。

聴かない事で、ASKA が捕まった事を知らない事にしたかった。認めたくなかった。

ファンが ASKA を追いつめてしまったのか…、と随分悔やんだ事もあったんだよ。

でもね、ASKA の歌は素晴らしい。

私は ASKA の音楽に助けられた。

ダメでダメで、『死』を選ぼうとした私を止めたのは ASKA なんだよ。

誰のどんな言葉より、言葉じゃない ASKA の歌が心に染みた。

ASKA の覚醒剤と私の交通事故。

全然違うけれど、

『まわりから上辺だけを撫でられる』
のは一緒なのかもしれないね。

人間は過去に生きるのではないから、
どんなにまわりから上辺を撫でられても、頑張ろうよ。

いつだって、

事故前も事故後も ASKA が私の生きる支え。

理解されない後遺症を背負った私でも、ASKA のライブに行く為にめげず働くから！
これからも頑張って生きるから、いつだって私の目標であってほしい。

いつだって、あなたの歌が私の背中を押してくれた。

いつか、もう一度ステージに立つアナタに、声援を送る一人で、その場にいますように。

2017 年 2 月 17 日

事故から17年目の冬。

去年は、十月に主治医の橋本圭司先生から朝日新聞の講演会に声を掛けていただき、自分の経験を講聴に來られた方々に聞いていただき、今リハビリを頑張っている方々や、支援する御家族の背中を押す事が出来た事は嬉しく思います。

今でもそうですが、
『家族』は『事故前』を知っているから、『元』に戻る事を大きく期待し、変わってしまった自分を出すとガッカリされ、怒りを出す。
小さな子供のように親から怒られたくないから、悲しいけれど親の前でも本当の自分を出さないで、いる。

【心配させたくない】
と、自分を作っている自分がいる。

親・兄弟・親戚・友人・知人：そして、先生
いままで私に関わって下さった皆様のお陰で、
私はここまでになれた、と思っております。ありがとうございます。

石黒順子